

東電記念財団ニュース

No.59 2026.9 発行

公益財団法人東電記念財団

TEPCO Memorial Foundation

〒100-0006 東京都千代田区有楽町1-7-1

有楽町電気ビル北館12階

Tel: 03-3201-2659 Fax: 03-3201-8630

tmfinfo@tmf-zaidan.or.jp

<https://www.tmf-zaidan.or.jp>

◇理事長からのご挨拶



理事長 山口 博

日頃より、当財団の事業運営にご理解とご支援を賜り厚く御礼申し上げます。

当財団の2025年度の研究助成事業におきましては、基礎研究8件、一般研究14件、国際技術交流援助24件、奨学金給付4件(採択総額1億369万円)を採択いたしました。昨年度と同規模の助成を継続できましたことは、当財団の研究助成事業を深くご理解頂き、ご支援を賜っております多くの法人様をはじめ、関係者の皆様の賜物と、心より厚く感謝申し上げます。

さて、社会の成長と発展の根幹をなすインフラである電気は、日本では「S+3E(安全性・安定供給・経済効率性・環境適合)」を基本とするエネルギー政策のもと、世界屈指の高品質かつ安定した供給環境が維持されてまいりました。しかし現在、電力を取り巻く環境は歴史的な転換期を迎えています。昨年2月に閣議決定された第7次エネルギー基本計画では、2040年に向けた政策の方向性が示され、また、本年7月の「日本成長戦略」においても、次世代太陽電池や蓄電池、水素、フュージョンエネルギーなど、エネルギー関連技術が官民による戦略的投資の重要分野として位置づけられています。

このような大きな転換期にあたり、昨年、1937年パリ万博の電気館のために描かれたラウル・デュフィの巨大壁画「電気の精」を鑑賞するため、パリ市立近代美術館を訪れました。古代ギリシャの哲人たちが集う牧歌的風景から、近代の産業発展、エジソンやモースらによる偉大な発明を経て、電気がもたらす光を浴びて「電気の精」が世界へ飛翔する姿を描いた圧巻の作品です。

万博から約90年を経た今日、もしデュフィが現代社会を目にしたら、電気が果たしている役割の進化にどれほどの驚きを感じるでしょうか。かつて電気は暗闇を照らす「光」や機械を動かす「力」という目に見える成果として讃えられました。しかし今や電気は、高度な情報通信網やAI、日々の社会機能を根底で支え、「見えざる手」のように社会構造そのものを形作る存在となっています。空間における照明や配線が人々の過ごし方を規定し、信号や鉄道の運行制御が都市のリズムを刻むように、電気は社会の「見えないデザイン」として機能しています。

電力システムとは、まさにその見えないデザインを社会に実装し、息づかせるための仕組みに他なりません。IEA(国際エネルギー機関)が「世界のエネルギーは本格的な電気の時代に入りつつある」と指摘する今、私たちは電気の本質的な価値と持続可能性を改めて問い直す必要があります。

脱炭素化の推進とエネルギーの安定確保を両立させるためには、これまでの枠組みを根本から更新するイノベーションが不可欠です。当財団では原理・技術の向上革新を目指す基礎研究とともに、従来の電気工学の枠を超えて情報・社会システムと融合し、全体最適を図る統合型研究に対しても広く応募いただけることを期待しております。

基礎研究の芽を育み、産業界や次世代社会への架け橋となることは、当財団の重要な使命であり、オンデマンド方式での研究テーマの紹介や成果報告会・贈呈式開催後の交流会も開催しております。「イノベーションは知と

知の交配から生まれる」と言われるように、研究成果報告会や交流会を通じた異分野の対話が、未来を拓く新たな創造へと結実することを願っております。

助成先の方々からは、「自由な発想で研究に集中できる有用な機会である」、「期中での審査委員の先生方からの専門的な助言が、研究の深化に貢献している」といった心強い声をいただいております。

民間研究助成財団としての役割が益々重要性を増していることを認識し、世界トップレベルの若い研究者の輩出を目指すと共に、ご寄附を通じたイノベーションへのご期待に応えるべく活動を進めて参る所存でございます。今後とも変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



ラウル・デュフィ作「電気の精」(パリ市立近代美術館蔵)

◇特別寄稿

「AI 時代における研究者へのエールと財団への期待」

東京電機大学客員教授・東京大学名誉教授
日高邦彦



この度、東電記念財団の研究助成修了者として寄稿の機会をいただき、感謝とともに、かつて若手・中堅研究者として本財団に背中を押していただいた日々の記憶を思い出しております。私がいただいた助成金は、単なる研究費の支援に留まらず、新たな領域への挑戦に対する力強い応援もあり、その後の研究者人生の礎の一つとなりました。

ホームページに記載されている山口博理事長の挨拶文から改めて財団のルーツを辿ると、1938 年に小林一三氏が「電気に関する研究こそが我が国の発展に不可欠である」との大局的な見地から設立をしたとあります。昭和恐慌後の激動の時代において、目の利益に捕らわれず、基礎研究から工業化までを見据えた実験工場を立ち上げたその志は、今なお色褪せることはありません。それどころか、地球環境問題やエネルギー転換期を迎えた現代において、その精神はますます輝きを増していると感じています。

一方で、現在の私たちを取り巻く研究環境は、当時とは異なる極めて流動的な変革期を迎えています。そこには、生成 AI（人工知能）の驚異的な進化があります。日々更新される膨大な論文を学習し、一瞬にして高度な計算コードを作成し、新材料の候補を予測してしまうような AI の出現は、研究のあり方を根本から変えつつあります。知識の記憶量や、既存のデータの組み合わせという点においては、もはや人間が AI にとても太刀打ちすることは不

可能でしょう。このような時代において、これからの未来を担う研究者は、どのように技術開発を進め、自らの存在意義を見出していくべきなのでしょう。私も答えを持ち合わせていませんが、一歩でも二歩でも前に進むためのヒントとなればと思うことを、3つほど記したいと思います。

第一に、多くの人が唱えていることかもしれませんが、「答えを出す力」から「問いを立てる力」への転換です。生成AIは与えられた問いへの最適解を導くことは得意ですが、「なぜこうなるのか」「どう社会課題を解決すべきか」といった根源的な問いを自発的に生み出すには至っていません。問いとは、研究者の個人的な好奇心や、社会に対する問題意識、時には「こうあってほしい」という願望から生まれるものです。AIという強力な計算・検索エンジンを道具として徹底的に使いこなしつつも、研究のナビゲータとなる「筋の良い問い」を立てる力を磨くことこそが、正に研究者に求められていると考えます。

第二に、最初に述べた小林一三氏が体現した「現場感覚」と「異分野融合」の重要性を挙げたいと考えます。小林氏は鉄道、都市開発、演劇、そして電力と、一見異なる分野を繋ぎ合わせて新たな文化とインフラを作り出しています。現代の電気・エネルギー分野も、デジタル技術やバイオ、行動経済学などとの融合が不可欠となっています。AIは既存のデータの相関関係を見つけることは得意ですが、混沌とした現実の現場に足を運び、泥臭い計測や実験の中から違和感やセレンディピティ(偶然の発見)を掴み取るころは、現時点では、やはり人間の五感として第六感ではないでしょうか。バーチャルな世界から飛び出し、異分野の研究者と対話し、リアルな社会の課題に触れることで、AIの計算だけでは辿り着けない、技術と社会を繋ぐ隠れた接点を見出すことができるはずです。

第三に、「失敗の価値」の再認識です。AIは効率性を最大化しますが、イノベーションの本質はしばしば、予測不可能な「失敗」の先にあります。例えば、ノーベル化学賞受賞の逸話として語られる、プラスチックの合成時に触媒濃度を通常の千倍という、理論上あり得ない濃度で入れてしまった実験ミスが、導電性プラスチックの発見に繋がった白川英樹博士の研究があります。効率を最大化するAIの予測からはエラーとして排除されてしまうような一見不条理な試行錯誤にこそ、革新的な技術開発のブレイクスルーが生まれる秘密があることを、歴史から学んでいます。効率主義だけに走らず、遠回りを恐れない愚直さを持つことも、最終的にAIを超える成果へと繋がる鍵かもしれません。

東電記念財団には、これまで1,600名以上の研究者を育て上げてきたその先見性と包容力をもって、王道を進む正統派の研究と共に、一見無謀に見える情熱やAIには評価できない尖ったアイデアに対しても支援の目を向けていただきたいと願います。効率とスピードが重視される世界だからこそ、若手がじっくりと腰を据えて不確実な未来を挑める「ゆとり」を提供できる存在であってほしいと思います。

かつて私が受け取った支援のバトンを次の世代へと繋ぐために、私もまた一人の助成修了者として、若き情熱あふれる研究者のこれからを応援し、共に歩んでいきたいと考えております。東電記念財団の今後ますますのご発展と、ここから世界に羽ばたくイノベーションが芽吹くことを心より祈念申し上げます。

◇奨学生からの便り(2026年度末奨学金給付終了予定者)



琉球大学大学院理工学研究科総合知能工学専攻
博士後期課程3年 上田聡一郎

現在、私は琉球大学大学院理工学研究科博士後期課程において、再生可能エネルギーを活用したエネルギーシステムの最適運用に関する研究に取り組んでいます。特に、太陽光発電、蓄電池、電気自動車(EV)等を組み合わせたEV充電駐車場や陸上養殖施設を対象として、平常時の経済性だけでなく、災害や停電時にも安定した電力供給を可能とするレジリエントなエネルギーシステムの実現を目指しています。また、数理最適化やモデル予測制御を用いて各設備を協調運用し、限られたエネルギーを有効活用する手法の検討も進めています。さらに、実際のEVや陸上養殖

設備を用いた実証研究を通じて、研究成果の社会実装を目指しています。

将来は、大学等の研究・教育機関において、エネルギー・電力分野の研究者として社会の課題解決に貢献するとともに、次世代を担う学生の育成にも携わりたいと考えています。特に、沖縄をはじめとする地域の特性や課題に根差した研究を進め、再生可能エネルギーの導入拡大と災害に強い地域社会の実現に貢献することが目標です。

東電記念財団には、博士後期課程で研究を継続する上で多大なるご支援を賜り、心より感謝申し上げます。今後も、電気・エネルギー分野を志す若手研究者への支援を通じて、研究者同士が交流し、互いに刺激を受けながら成長できる機会を提供していただけますと幸いです。私自身も、いただいたご支援を研究成果として社会に還元できる研究者を目指してまいります。



東京科学大学工学院システム制御系システム制御コース
博士後期課程3年 西野 択

私が専攻するシステム制御工学は、現実の現象を数理モデルとして捉え、解析から得た知見を実際のシステムの設計や運用へ還元する学問です。博士課程では、この考え方を電力系統に応用し、再生可能エネルギーの大量導入が進む中でも、安定して電気を届けるための解析手法を研究してきました。

従来の固有値解析では、送電網や発電機、負荷の情報を一か所に集約し、系統全体を一括して調べます。これに対し私は、安定性を表すヤコビ行列をエネルギー関数に基づいて分解し、発電機やインバータなどの機器ごとの評価と、そこで得た値を用いた系統全体の評価を組み合わせる階層的な解析法を提案しました。さらに、各機器が安定性にどれほど寄与するかを数値化し、系統の基準をつくる GFM (Grid-ForMing) と、系統に追従する GFL (Grid-FoLLowing) という二つのインバータ運転方式を、どこに配置すべきか検討する枠組みへ発展させました。

私はもともと電力工学ではなく、システム制御工学を専門としていましたが、培ってきた知見を電力系統に生かしたいという挑戦を、東電記念財団に3年間支えていただきました。研究に専念できたことで、国際学会で多くの研究者と議論を重ね、学会発表で賞をいただくこともできました。来年度からも、引き続き電力分野の研究開発に携わる予定です。今後も、分野を越えて挑戦する若手研究者を支えていただくことを願うとともに、私自身も将来の電力系統を支える研究に取り組んでまいります。

◇2026 年成果報告会・贈呈式

1. 日 時 2026 年 4 月 9 日 (木) 15:00～18:30
2. 会 場 一般社団法人日本工業倶楽部 3 階大ホール
3. プログラム

(1)開会挨拶 理事長・山口 博

(2)成果報告会 2025 年度基礎研究助成終了者代表 2 名

①宮崎大学・准教授 永岡 章

「200℃以下の排熱を有効活用する新規熱電変換材料の開発とデバイス応用」

②名古屋大学・准教授 宮町俊生

「単位格子極限計測による界面スピンオービトロニクスの開拓」

- (3)基 調 講 演 早稲田大学・教授、株式会社 Nanofiber Quantum Technologies CSO 青木隆朗
「量子コンピュータと起業」
- (4)贈 呈 式
- ・選 考 評 2025 年度審査委員長 東京科学大学理事(総合戦略担当)・教授 井村順一
 - ・贈呈書授与 理事長 山口 博
 - ・代表者挨拶 中央大学・助教 李 恒



2026 年成果報告会・贈呈式の様子

去る 4 月 9 日、日本工業倶楽部(千代田区丸の内)にて、2026 年成果報告会・贈呈式を開催いたしました。

最初の成果報告会では、2025 年度研究助成(基礎研究)助成終了者代表として宮崎大学の永岡 章准教授と名古屋大学の宮町俊生准教授からそれぞれ採択課題の研究成果を一般の方々にも分かりやすく発表して頂きました。

続く基調講演では、早稲田大学の青木隆朗教授より、「量子コンピュータと起業」というタイトルでご講演頂きました。

贈呈式では、2025 年度審査委員長・井村順一先生より選考評を頂いた後、山口博理事長より採択者の皆様に贈呈書が授与され、最後に採択者代表として、研究助成(基礎研究)採択の中央大学の李恒助教より、ご自身の研究内容の紹介や今後の夢についてご挨拶を頂きました。

終了後の交流会においては、基礎研究助成 OB の方にもご出席頂き、幅広い分野の助成者・助成修了者の交流の場として、盛会のうちに終了することが出来ました。

ご出席頂きました皆様方のご協力により、無事に開催出来ましたことを感謝申し上げます。

◇2025 年度採択実績

2025 年度の新規採択実績は、以下の通りです。(採択額合計 103,699,000 円)

・研究助成(基礎研究): 8件	総額 75,000,000 円
・研究助成(一般研究): 14件	総額 14,000,000 円
・国際技術交流援助: 24件	総額 9,299,000 円
・奨学金給付: 4件	総額 5,400,000 円

2025 年度研究助成(基礎研究)採択者

No.	氏名・採択時所属 (敬称略50音順)			研究題目	研究 期間 (年)	助成 総額 (万円)
1	飯田隆人	大阪大学	准教授	前後非対称ジャイロ式波力発電による全周波数・完全エネルギー吸収理論の確立	2	1,000
2	CHIU WAN TING	東京科学大学	准教授	高効率水素冷却を実現する革新的磁気冷凍材料の開発と持続可能な物質循環システムの構築	3	800
3	車 一宏	東京大学	助教	ダイヤモンドナノ構造を用いた高効率フォノン制御技術の開発	2	900
4	小林裕一郎	大阪大学	助教	廃硫黄を用いた室温合成硫黄ポリマーの創製とその電池材料応用に関する基礎研究	2	900
5	長澤 剛	東京科学大学	准教授	高温電極・触媒界面の定量化を実現する原子レベル可視化解析基盤	3	1,000
6	藤井勇介	九州工業大学	准教授	水素社会の実現に向けた超高出力密度ペアリングレスモータの開発	2	1,000
7	武道宏平	岐阜大学	テニユアトラック 助教	入力直列方式を用いた高電圧 SR-SAB コンバータのフィードバック制御系の構築	3	900
8	李 恒	中央大学	助教	任意形状へ塗れる光熱電変換イメージセンサによる高架送電線のオンサイトなミリ波-赤外 CT 非破壊検査	2	1,000

◇2025 年度研究助成(一般研究)採択者

No.	氏名・採択時所属 (敬称略 50 音順)			研究題目	研究 期間 (年)	助成 総額 (万円)
1	飯田和昌	日本大学	教授	中性子照射に強靱な次世代超伝導線材の基礎設計	2	100
2	石井慶子	中央大学	准教授	ナノファイバーを内包した超薄型ペーパーチャンバーの創生	1	100
3	石山隆光	筑波大学	特任助教	新規 Yb 系化合物薄膜の物性制御とフレキシブル熱電デバイス応用	2	100
4	磯辺 篤	東京科学大学	助教	新たな多孔質有機構造体の創出による高性能スーパーキャパシタの開発	1	100
5	上原明恵	琉球大学	助教	小規模離島系統におけるスマートコミュニティを活用した最適運用に関する研究	1	100
6	桶川雄生	東京科学大学	博士後期課程 1 年	IGBT の非多重直列接続を達成するヒューズ限流式直流遮断器の開発	2	100
7	桑原央明	芝浦工業大学	准教授	異形配管に対応する可変剛性制御型移動ロボットの開発	1	100
8	高橋一匡	長岡技術科学 大学	准教授	加速器駆動中性子源による高レベル放射性廃棄物核変換処理に向けたリチウムイオンビーム形成に関する研究	1	100
9	平野 琴	産業技術総合 研究所	研究員	音エネルギー精密評価に向けた光共振器型音圧計測装置のノイズ低減	2	100

No.	氏名・採択時所属 (敬称略50音順)			研究題目	研究 期間 (年)	助成 総額 (万円)
10	藤田鈴香	香川高等専門学校	技術職員	Minecraft を用いた放射線教育教材の開発と教育効果の測定	1	100
11	松永 航	京都大学	助教	電磁界制御を利用した電磁誘導試験におけるエッジ効果抑制手法	1	100
12	宮下匠人	北海道大学	助教	溶融塩電解を用いたジルコニウムとハフニウムの高効率分離手法の開発	2	100
13	山口堅三	阿南工業高等専門学校	准教授	再生可能エネルギー応用に向けた動的光制御メカニカルプラスモニクス偏向素子の開発	2	100
14	吉澤明菜	九州大学	助教	高耐久性 CO ₂ 還元触媒となる担持金ナノ粒子触媒の含浸法による触媒調製法の確立	1	100

◇2025 年度国際技術交流援助採択者

No.	氏名・採択時所属 (敬称略50音順)			渡航件名	渡航先	採択額 (万円)
上 期						
1	李 垂範	信州大学	助教	Daegu Gyeongbuk Institute of Science and Technology	韓国	19.5
2	数野未結※	上智大学	修士1年	第17回超電導応用欧州会議	ポルトガル	32.1
3	北川魁人	徳島大学	修士2年	第16回エコマテリアル国際会議	タイ	20.6
4	郭 妍伶	長岡技術科学大学	助教	ゴードン・リサーチ・カンファレンス(高温腐食)	アメリカ	32
5	WU ZEYU	九州大学	助教	第17回欧州応用超伝導学会	ポルトガル	40
6	ZAMPA Alexandre	東京大学	特任研究員	第17回欧州応用超伝導学会	ポルトガル	40
7	Thanigan Nakkhong	東京農工大学	博士後期課程1年	2025年環太平洋化学会議	アメリカ	31.4
8	永田歌寧※	京都大学	修士2年	SPIE 光工学＋光子学	アメリカ	50
9	野島渉平※	東北大学	博士後期課程2年	ヨーロッパ応用超伝導会議	ポルトガル	40
10	藤原千隼	東北大学	博士後期課程1年	遷移元素の励起状態に関する国際会議 (ESTE 2025)	ポーランド	45.6
11	真山彩葉子	同志社大学	修士1年	KTH-Royal Institute of Technology	スウェーデン	50
12	森迫祥吾	相模中央化学研究所	副主任研究員	環太平洋国際化学会議 2025	アメリカ	39.7

No.	氏名・採択時所属 (敬称略50音順)			渡航件名	渡航先	採択額 (万円)
下期						
1	小川広太郎	工学院大学	博士後期課程 3 年	欧州 MRS (Materials Research Society) 2026 年 春季大会	フランス	43
2	木梨裕太	筑波大学	修士 2 年	第 27 回制御核融合装置におけるプラズマ表面相互作用に関する国際会議	ドイツ	30
3	後藤彩乃	東京農工大学	博士後期課程 1 年	第 31 回 プラズマ物理・技術シンポジウム	チェコ	36
4	近藤慎司	大阪大学	助教	19th International Symposium on Polymer Electrolytes	スペイン	47
5	高橋 護	三重大学	助教	乱流およびせん断流現象に関する国際会議	ドイツ	43
6	鳥居真人	大阪公立大学	博士後期課程 3 年	第 25 回固体イオニクス国際会議	シンガポール	35
7	中田佳吾	東京大学	修士 2 年	IEEE 国際磁気学会	イギリス	43
8	中谷利毅	東北大学	修士 2 年	MOF2026	アメリカ	47
9	野々山颯太※	名古屋大学	修士 1 年	第 24 回ガス放電とその応用に関する国際会議	イギリス	38
10	藤本真音	東京大学	修士 1 年	University of Groningen 滞在研究	オランダ	50
11	横田信英	静岡大学	准教授	第 30 回半導体レーザ国際会議	フィンランド	34
12	渡邊篤人	東京科学大学	博士後期課程 2 年	2026 年欧州材料科学会 春季講演会	フランス	43

※他財団採択・会議中止等にて受給辞退

◇2025 年度奨学金給付採択者

No.	氏名 (敬称略50音順)	採択時所属	月額 (万円)	給付 期間 (月数)
1	石橋拓真	琉球大学大学院理工学研究科総合智能工学専攻・博士後期課程1年	5	24
2	梶原君円	筑波大学数理物質科学研究群応用理工学学位プログラム・博士後期課程1年	5	24
3	嵯峨稔己	京都大学大学院エネルギー科学研究科エネルギー社会・環境科学専攻 博士後期課程1年	5	24
4	横山尋斗	東京大学大学院工学系研究科電気系工学専攻・修士2年	5	36

◇2026 年度募集

2026 年度の募集スケジュールは、以下のとおりです。詳細は財団ホームページ(<https://www.tmf-zaidan.or.jp/>)をご覧ください。

種 別	対 象	申込締切日
研究助成(基礎研究)	広く電気・エネルギー分野の若手研究者による独創的な基礎研究への助成	2026 年 9 月 30 日(水)
国際技術交流援助下期(渡航・滞在)	国際会議出席とそれに伴う海外研究機関打ち合わせ等に伴う海外渡航・研究滞在	2027 年 1 月 31 日(日)

※2026 年度研究助成(一般研究)、奨学金および国際技術交流援助上期の募集については、既に終了しております。

◇2025 年度寄附会社様

指定寄付金として、以下の 16 法人から 3,150 万円、また 1 個人から 1 万円の総額 3,151 万円のご寄付を頂きました。(順不動)

- ・ 株式会社関電工 様
- ・ 東光建物株式会社 様
- ・ 株式会社東京エネシス 様
- ・ 株式会社東光高岳 様
- ・ 住友電気工業株式会社 様
- ・ 古河電気工業株式会社 様
- ・ NGK 株式会社(旧:日本ガイシ株式会社) 様
- ・ 日本工営エナジーソリューションズ株式会社 様
- ・ 東芝エネルギーシステムズ株式会社 様
- ・ 株式会社TMEIC 様
- ・ 一般財団法人関東電気保安協会 様
- ・ KDDI株式会社 様
- ・ 株式会社三英社製作所 様
- ・ 株式会社明電舎 様
- ・ 株式会社ダイヘン 様
- ・ OBARA エナジーコンポーネンツ株式会社 様
- ・ 個人 様(匿名希望)

◇2026 年度役員・評議員・審査委員

<2026 年 9 月現在(50 音順、敬称略)>

理 事 長	山口 博	(公社)日本電気技術者協会会長
常 務 理 事	蘆立修一	(公財)東電記念財団(常勤)
理 事	石山敦士	早稲田大学名誉教授
	神成文彦	慶應義塾大学名誉教授
	西澤俊夫	元東京電力(株)
	松本洋一郎	東京大学名誉教授
	山口 学	元(株)関電工会長
監 事	白羽龍三	元新日本有限責任監査法人常務理事
	武井 優	元東京電力(株)副社長
評 議 員	伊賀健一	東京科学大学栄誉教授・元学長
	鈴木教洋	(株)日立総合計画研究所取締役会長
	藤嶋 昭	東京理科大学栄誉教授・スペースシステム創造研究センター特別顧問
		東京大学名誉教授
	正田英介	(公財)鉄道総合技術研究所フェロー・東京大学名誉教授
	榎本晃章	元東京電力(株)副社長
	山地憲治	(公財)地球環境産業技術研究機構理事長
審査委員長	井村順一	東京科学大学理事(総合戦略担当)・工学院シスム制御系教授
審 査 委 員	岡田健一	東京科学大学工学院電気電子系教授
	神谷利夫	東京科学大学総合研究院元素戦略 MDX 研究センターセンター長・教授
	近藤圭一郎	早稲田大学理工学術院理工学術院長補佐(学生, 研究担当)
		先進理工学部電気・情報生命工学科教授
	斎木敏治	慶應義塾大学理工学部電気情報工学科教授
	染谷隆夫	東京大学大学院工学系研究科教授
	長汐晃輔	東京大学工学系研究科アテリアル工学専攻教授
	藤井康正	東京大学大学院工学系研究科原子力国際専攻教授

2025 年度も沢山のご応募を頂きまして誠にありがとうございました。当財団は、引き続き応募者の皆様の研究環境を理解することに努め、更なる助成内容の充実を目指すべく努力して参ります。

今後ともご支援、ご鞭撻のほど宜しく願い申し上げます。

公益財団法人東電記念財団
事務局